

アザロの到着地にいたのは、われわれのほうだった

2009年6月20日 梅 正行(中京大学)

青いサングラスと亀 「青いサングラスの話」(原文482 - 84)

ベン・オクリの半生と作品 一九八九年 『花と影』(アザロものとして再編) 一九八二年 『内部の風景』(『危険な愛』として再編) 一九八六年 『神殿での出来事』(短編集) 一九八八年 『新たなる戒厳令下の星空』(短編集) 一九九一年 『飢えたる道』(邦訳『満たされぬ道』、精霊の少年アザロを主人公とする小説) 一九九二年 『アフリカン・エレジー』(詩集) 一九九三年 『魅惑の歌』(アザロを主人公とする小説) 一九九五年 『見えざる神々の島』(イタロ・カルヴィーノ風の不思議な島の話) 一九九六年 『天空の鳥』(評論集) 一九九六年 『危険な愛』(画家オモヴォを主人公とする小説) 一九九七年 『自由になる方法』(評論集) 一九九八年 『無限の富』(アザロを主人公とする小説) 一九九九年 『メンタル・ファイト』(詩集) 二〇〇一年 『アルカディアにて』(アルカディアを主題にドキュメンタリー映画を撮るグループの人々のアルカディア観) 二〇〇七年 『スターブック』(ある王子の物語) 二〇〇九年 『自由をめぐる話』

参考文献(レイアウトの関係でここに)

ベン・オクリ

Incidents at the Shrine, 1986, Vintage, 1993., *Stars of the Late Curfew*, London, 1988., *The Famished Road*, London, 1991(引用翻訳は金原瑞人訳を用いた), *African Elegy*, London, 1992., *Songs of Enchantment*, London, 1993, *Astonishing the Gods*, London, 1995., *Dangerous Love*, London, 1996., *Birds of Heaven*, London, 1996., *A Way of Being Free*, London, 1997., *Infinite Riches*, London, 1998., *Mental Fight*, London, 1999., *In Arcadia*, London, 2001., *Starbook*, London, 2007., *Tales of Freedom*, 2009., Brenda Cooper, *Magical Realism in West African Fiction*, Routledge, 2004.

引用 (レイアウトの関係でここに) We searched for mum everywhere. (中略) No one had seen her and no one knew who we are talking about. (中略) Then he[dad] began wandering the confusing streets, the dirt tracks, the rough pitted road, turning down blind alleys, backstreets, rutted pathways, roads that curved on themselves, following what he imagined to be the secret trail that mum took when she went hawking her meager wares. How we wandered that day! The world seemed to be the nightmare of streets, a fiendish labyrinth of paths and crossroads devised to drive human beings mad, calculated to get us lost. The world seemed to be composed of recently invented byways and tracks and dirt-roads created by the endless desire of human beings of shortcuts that elongate journeys, roads that start to induce their own peculiar form of dreaming on the exhausted soles of the feet. There are demons lurking underfoot in all the streets of the world that love to take men on terrifying unintended journeys. (Ben Okri, *Songs of Enchantment*, p.32)

リアリズムとマジックリアリズムの間の往還

表1 ベン・オクリの作品

リアリズム的	マジックリアリズム的	リアリズム的	マジックリアリズム的	詩集	評論
ナイジェリア	ナイジェリア	ロンドン、パリなどヨーロッパ	具体名のない「島」や「王国」		
			『スターブック』(07)		
		『アルカディアにて』(01)			
				『メンタル・ファイト』(99)	
	『無限の富』(98)				
					『自由になる方法』(97)
『危険な愛』(96)					『天空の鳥』(96)
			『見えざる神々の島』(95)		
	『魅惑の歌』(93)				
				『アフリカン・エレジー』(92)	
	『飢えたる道』(91)				
『新たなる戒厳令下の星空』(88)					
『神殿での出来事』(86)					
『内部の風景』(81)					
『花と影』(79)					

「差し引いて読む」と「付け足して読むこと」

表2 用語と作家、作品世界とのかかわり

「近代」という用語のわかりにくさ	
作家	作品世界
ディケンズ	『荒涼館』
× ナイポール	× 『ピスワス氏の家』
× オクリ	× 『飢えたる道』 『魅惑の歌』 『無限の富』

道の作家たち

表3 道の作家たち

作家	作品	出発地	道	到着地
ディケンズ	『オリヴァー・ツイスト』			
ディケンズ	『大いなる遺産』のウエミック	ジャガーズの事務所	ロンドンの道	父と婚約者の待つ家
ディケンズ	『荒涼館』のリチャード	荒涼館	さまざまな住居(ただし横着なりチャードは道を歩かない?)	裁判所に近い住居
キプリング	『キム』のキム			
チュツオーラ (精霊というオクリ的要素)	『やし酒のみ』	父の農園	森の中の道	やし酒つくりのいるところ
アチェベ (アビクというオクリ的要素)	『崩れゆく絆』	父の村(英雄)	母の村(七年間)	父の村(自殺)
ショインカ (道というオクリ的要素)	『ロード』	イバダン ラゴス ラゴス イバダン 芝居の演出のために車で往復	The right foot for joy, the left, dread And the mother prayed, Child May you never walk When the road waits, famished.	
ナイポール (道に住む人々)	『ミゲル・ストリート』の少年	ミゲル・ストリートにある母の家	ミゲル・ストリート	ロンドン

ナイポール(帰郷の航路)	『ミドル・パッセージ』のナイポール	イギリスから逆方向の旅に出る(帰郷)	航海。船の乗船者を克明に描写	トリニダードと四つの地域
ナイポール(不毛なドライブ)	『自由の国で』『自由の国で』とロッシュ	会議会場の首都	アフリカの道	勤務地
ナイポール(プジョーで東から西に道をたどるサリム)	『暗い河』のサリム	アフリカ東海岸	プジョーでアフリカの道を東から西へ(『闇の奥』のマーロウと逆方向)	キサンガニ(そしてロンドン)
ナイポール(ナイポールが道をたどり到着した場の克明な描写)	『到着の謎』の私	トリニダード	世界中の道の旅	ウィルトシャー
ナイポール(トリニダードを出て、棺に入れられトリニダードに戻ったブレアの話など)	『世の習い』のブレア	トリニダード	アフリカ(ブレアのたどった具体的道の記述なし)	トリニダード(埋葬)、ブレアの無言の帰郷に自分を重ねるナイポール(キャリル・フィリップス説)

引用 「ニュー・アカデミズムの形成に文化人類学が中心的な役割を果たした。未開社会の共同体の生活風景の中に入り込んで、『彼ら』の世界観を見出し、『我々』に伝えるという役割を果たすというイメージのある『文化人類学者』は、もともと異能・異質の存在、もっと言えば、『トリックスター』あるいは『異人』と見られていたきらいがある。(仲正昌樹『日本の現代思想』、NHK ブック、195 頁)

ベン・オクリ主要作品の道

表4 オクリの作中人物はどこにたどりついたか？

作品	作中人物	21世紀の日本のディケンズ読者の姿勢	出発地	道	到着地	備考
『橋の下の笑い』『神殿の出来事』	一人称の語り手「ぼく」、父、母、少女モニカ、兵士たち	差し引いて読む(近代化以前のナイジェリア)	寄宿学校(少女時代のモニカの記憶)	戦場の道 兵士に連れ去られる人々	父、母、モニカのいる町	モニカも最後に兵士に連れ去られる
『飢えたる道』	アザロ、父、母、マダム・コト、写真屋、家主、精霊の王、精霊たち、イエロー・ジャガー、グリ	付け加えて読む(読者は精霊の世界を想像して作品を読む)	精霊の世界の偉大な王のいる精霊の国	森の中の道 工事現場	父、母のいる一部屋の住居。ベッドとテーブルと椅子とマット。炊事場とトイレは共同。	アザロの到着地にいたのはわれわれだった

	ーン・レパード、黒猫、借金取りたち、白い服の男、貧乏党员、金持党员					
『魅惑の歌』	『飢えたる道』に同じ	付け加えて読む（読者は精霊の世界を想像して作品を読む）				
『見えざる神々の島』	一人称の語り手「ぼく」、さまざまな声の持ち主、女、第一の師、第二の師、第三の師	非リアリズム世界	故郷（はじめは羊飼いなろうとした）	海という道の七年間の航海	見えざる神々の島	イタロ・カルヴィーノの『見えない都市』、ナイポールの『到着の謎』につながる。
『危険な愛』	オモヴォ、イフィー、ドクター・オコチャ	差し引いて読む（近代化以前のナイジェリア）	故郷	街の迷路でイフィーを追うその後、故郷を離れる	故郷に戻りイフィーの死を知る	イフィーの死後、絵を描くことで情熱を昇華。恋愛を描くことの不得手なオクリ
『無限の富』	『飢えたる道』に同じ	付け加えて読む（読者は精霊の世界を想像して作品を読む）				
『アルカディアにて』	ドキュメンタリーの撮影クルーたち	アルカディアの探求の現代小説	倦怠感漂う日常生活の場口 ンドン	一行を乗せた列車がたどる鉄の道	ギリシャ、アルカディアに至らず、スイスに向かう途上で終わる	作中人物それぞれのアルカディア告白
『スターブック』	王子、王、乙女	非リアリズム世界	宮殿	森の中の道	森で出会った乙女との結婚	恋愛を描くこと不得手

引用 モニカの顔は青ざめていた。まるでモニカが自分の体から長い旅に出たかのような感じだった。(「橋の下の笑い」『神殿の出来事』)

『飢えたる道』

引用 初めに川があった。川は道になり、道は枝分かれして全世界に広がっていった。道はかつて川だったから、いつも飢えていた。

その始原の地では精霊たちが、生まれる前の子供たちとまじりあって暮らしていた。

(中略)

ぼくたちの幸せが大きくふくらむにつれて、生まれるときが近づいてくる。そしていよいよ生まれかわるときがくると最初の機会をとらえてこの精霊の世界に戻ってくるという約束をする。

(中略)

その誓いを立てた者は、生者の世界で「アビク」、つまり「精霊の子」と呼ばれる。人間がみんなぼくたちに気づくというわけではない。(原文3、翻訳上巻9 - 11頁)

表5 『飢えたる道』の舞台と作中人物

	精霊の世界 始原の世界 死者の世界	現実の世界 生者の世界
場(舞台)	森 森のなかの道 川 七つの山	街 人の住む道の道 市場 母の屋台 アザロの通う学校 父の働く集荷場 建設現場 空き地 鉄塔 高速道路の始点
人または精霊 (どちらか一方の世界の住人と決め 付けることが困難な作中人物多数)	精霊 道の神 道の王 偉大な王者 黒猫 グリーン・レパード(父の対戦相手) イエロー・ジャガー(父の対戦相手、 精霊の世界からやってきたボクサー) 白い服の男	アザロ 父(ブラック・タイガー) 母 マダム・コト 写真屋 家主 借金取り 金持党员たち 貧民党员たち

	エイド（アザロの親友） 少女 雨の女王	薬草医
--	---------------------------	-----

引用 ぼくはどこにいけばいいかわからず、通りをあっちにいたりこっちにきたりしていた。あたりにはネズミの焼けるにおいがまだ強烈に残っていたので、森のまわりを歩いてみた。そこを歩いていた何本もの小道はもう太い通りになっている。ぼくは長いこと散歩するうちに突然、別の世界に飛びこんだ。まさかこんなところがあるとは思ってもみなかった。その世界では森は征服しつくされ、残っているのは木の切り株と、にじみ出る樹液だけだ。大地から何本もの木の柱が突き出ている、電線が空を走って、地面のケーブルまでのびている。（原文277、翻訳下巻18頁）

引用 「おそらく、道が完成してしまうと、もうすることがなくなり、夢が消えて、未来もいらなくなってしまうからだろう。完成してしまえば、退屈のあまり、滅びるしかない。道は、連中の魂なんだ。その魂は、連中の歴史そのものなんだ。だから、道がかなりできてしまったり、連中が予言をわすれかけて道が完成したと思いきみそうになると、いろいろなことが起こる」（原文329 - 33、翻訳下巻107頁）

引用 「道の王が地面の下からうなる声は聞こえてきたらしい。こうして、道の王はこの世界のあらゆる道の一部になったというわけだ。道の王はいつも飢えている。そしていつまでも飢えているだろう。だからこの世界で、いろいろな事件が起こるんだ」（原文258 - 59、翻訳上巻432頁）

引用 自分自身を、今までとは違う目でみなくてはならない。（中略）わけわかれの飢えは世界を変えることができる。（中略）すべての道は死に通じているが、何本かは、決して終わることのないものへと通じている。素晴らしいものへと。（原文498、翻訳下巻387頁）

『アルカディアにて』

表6 それぞれのアルカディア

『アルカディアにて』の作中人物	職業 撮影旅行での担当	それぞれがパリのイタリアン・レストランで語ったアルカディア
プロブル（男性）	機材	金
サム（男性）	カメラマン	探求行為
ジュート（女性）	経理	仕事
ジム（男性）	監督	グルに学ぶこと
ハスク（女性）	オーガナイザー	愛
ライリー（女性）	アシスタントカメラウーマン	夏の海で泳ぐこと
ラオ（男性）	インタビューアー	死を意識しての生
ミスルトウ（女性）	ラオの友人、画家	旅、絵を描くこと
マラッソ（男性）	企画全体を統括する謎の人物、作品に姿を見せず	不明
ルーク（男性）	ユーロスターの運転士	パリ郊外の小さな庭
オデッサ（女性）	ルークの妻	ルークに同じ
ルーブル美術館の館長	美術専門家	だれもいない博物館（陳列物を独占）

小説の力：アザロ三部作と『アルカディアにて』

表6 手法の異なるふたつの作品

	『飢えたる道』、『魅惑の歌』、『無限の富』	『アルカディアにて』
主人公	七歳のアビクの少年アザロ	思索的な男ラオ
移動	往還的	直線的
目的地	現実世界（父と母のいる場）	死を意識した上で現実を生きること
ジャンル	小説的	非小説的
時代設定	ブレモダン	ポストモダン
大学	いまだ父の壮大な夢の中にしかない	倦怠
道	具体的	やや抽象的（ユーロスターの走る線路）
入れ子構造	父の語る「道の王」の話 母の語る「アフリカを出る一本の道」の話	作中人物たちのアルカディア観 ウェルギリウスとブッサン 美術館長とラオの対談
ディケンズとの関係	ディケンズ的	非ディケンズ的

引用 「いま私たちが『文学』と考えているもの、とくに小説は成立期をブルジョアジーの台頭とともにして、ブルジョアジー的人間形成を反映し、またその形成に大きな役割を担ったわけです。そして小説の主流は内へ内へと進み、内面たるものを作り出していった。豊かな内面と個人主義とは互いを前提として、個人の力ではどうしようもない外界、エネルギーで俗悪な資本主義社会からセンシティブな内面は尻込みし、疎外感に浸ることになります。ここでいう『疎外感』とは前近代的なしがらみから解き放たれた個が味わえる唯一の自由の形態、つまり、内面の自由です。（別段落）日本の近代主義を象徴する私小説は、主に生活に不自由せぬ男性の心理を探求してきました。」（ノーマ・フィールド『小林多喜二』、岩波新書、2009年）

作家	作品	時代設定	発表年代	
ヴィクラム・セート	『婿探し』	1940年代	1993年	インドの独立
ロヒントン・ミストリー	『絶妙のバランス』	1940年代	1995年	インドの独立
V・S・ナイポール	『ビスワス氏の家』	1950年代	1961年	トリニダードの独立
シヴァ・ナイポール	『蝨』	1950年代	1970年	トリニダードの独立
ベン・オクリ	『飢えたる道』	1960年前後	1991年	ナイジェリアの独立

先行作家の呪縛